

有形民俗文化財

と の し ろ めん
登野城のアンガマ面

指定年月日／2004（平成 16）年 12 月 24 日 所在地／登野城 4-1（八重山博物館）



この面は、登野城村のアンガマ行事の時に使用されたもので、1844年に登野城村の黒島良慶によって制作されたと伝えられている。登野城字会所有。

アンガマとは、旧暦 7 月 13 日から 15 日の 3 日間行われるソーロン（精霊会、盂蘭盆）の時に、ウシュマイ（翁）、ンミー（媪）を先頭に 20 人前後の供の者が請われた家々をまわり、その仏前で念仏謡や歌舞を行い、祖霊供養をする行事である。

この面はウシュマイ、ンミーがかぶったもので、デイゴ材を彫刻して作られている。登野城村のアンガマ面は、登野城里喜が制作したものを

使っていたが、使用不能になったので、良慶が 17 歳の時に新たに制作したと伝えられている。デイゴ材を 7 回も蒸して用心しながら彫刻し、粘土で型を取って制作したとの伝承もある。

作者の黒島良慶（1828～1906）は、1882（明治 15）年の権現堂補修の際は、彫刻面で大いに活躍したと伝えられている。この面は、八重山の民俗のみならず彫刻技術を知るうえでも貴重な資料である。

市指定

有形民俗文化財

ふうすい し なんぼり
風水指南針

指定年月日／2004（平成 16）年 12 月 24 日
所在地／登野城 4-1（八重山博物館）



この風水指南針は、1895（明治 28）年に登野城村の黒島良慶によって製作されたものである。良慶は 1882（明治 15）年の権現堂補修の際には彫刻面で活躍したと伝えられ、また、現存する「登野城のアンガマ面」（市指定有形民俗文化財）は良慶 17 歳の作と伝えられている。

この風水指南針は、家屋や墓を築く際の吉凶判断に使用されたものである。八重山博物館所蔵「新城鐵太郎家文書」によると、良慶は 1860 年に指南針の製作法を学び、以後公用など依頼されて 13 点の「航海用」指南針を製作または修理をしている。なお、「風水用」を何点製作したかは不明である。

収納箱蓋表に墨書があり、良慶の長子である黒島英貴の名で、所望する人に有償で指南針を貸し出していたことが記されている。その年代は、「字登野城」と

いう記述から、登野城村が字に移行した 1908（明治 41）年以降である。

この風水指南針は、八重山における風水思想や当時の民俗を知るうえで貴重な資料である。